

第39号

平成22年

4月30日

題字植木満
初代東進会会長**発行所**

土浦一高東進会

〔茨城県立土浦一高〕
進修同窓会東京支部**発行人**

東進会会長 大野 金一

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-5 砂防会館4階

宮崎法律事務所 TEL 03-3221-3711 FAX 03-3221-3713

ホームページ http://www.geocities.jp/t_toshinkai/

〔撮影 昭和31年卒 熊木 士郎氏〕

■特別寄稿

土浦一高校歌にかかわるエピソード

大曾根 宏 亮

(第24代校長 昭和27年卒)

■寄稿

私の起業論

池和田 暁 (昭和40年卒)

■水戸観梅紀行**■平成22年度総会・懇親会ご案内**

講演 キャリア形成とネットワーク

鈴木 貴美子 (昭和55年卒)

■半了のささやき(連載第9回)

タンジェント

■平成21年度大学進学状況

土浦一高校歌にかかわるエピソード



大曾根宏亮
第24代校長
(高4回卒)

校歌はもともと愛唱される歌ではないかと思われる。何年となく学校行事や卒業生の会合で歌われ続けている。一年に何千という人が肩をくみ、手拍子を打って歌っていると思われる。それでいて作詞者が誰か、作曲者が誰かということになるとあまり気にされないようである。

現在学校を開校させる場合には、まず敷地が求められ、校舎が建てられ、校名が定められ、教育内容というか目標が検討され、校歌がつくられる。だから開校式には必ずと言ってよいくらい校歌が披露される。しかし明治期の旧制中学校では、学校がスタートしてしばらくたち、生徒会活動が隆盛化して初めて校歌がつくられる。それまでは大学の寮歌や軍歌等が志気を鼓舞する手段として歌われたようだ。我校も明治三十年に創立されるや直ちに各種の部活動(サッカー、野球、銃剣道等)が開始された様子が当時の生徒会誌「進修」に記載されているが、校歌の話はしばらくなかったようだ。第二回卒業生の名越那珂次郎(明治三十六年卒)は、卒業後旧制二高(帝国大学の予備校で当時は全国八か所あり、二高は仙台にあった)に進学し、土井晩翠の作詞した校歌に感動し、進修第八号(明治三十八年発行)に次のような文を寄せている。「母校には未だ校歌これなき様存じ候。近年は全国の中学にて流行の様相に相成り居り、敢えて真似と云うわけにはこれなく候えども、又は旅行の折、運動散歩の時自校の歌無くして他校の歌など歌い候は如何あるべき、桜水

健児の意気を鼓舞するの校歌を合唱し進修の気躍々として常南の天を風靡するの痛快なるに如かずと存候・・・」

校歌を募集

やがて明治三十九年前後に、早大出身の小田原勇(鹿児島生、明治三十九年十月〜四十二年一月在職)、東京高師出身の尾崎楠馬(土佐生、四十年四月〜四十四年七月在職)、早大出身の北玲吉(佐渡生、四十一年十月〜四十四年三月在職)。昭和二十年代衆議院議員として活躍。弟北一輝は昭和初期の右翼のリーダー)、大峽秀栄(明治四十年十一月〜四十四年一月在職)等の若手の教師が次々と着任し、土浦中の意気は大いに上がり、校歌作成の気運も盛り上がったようである。国漢の教師尾崎が全校に校歌の歌詞を募集し、応募作品の中で最も優秀な四年生堀越晋の作品に補筆を加え、尾崎自身(元小学校教師でオルガンが得意)が作曲して完成したのが土浦中の校歌で、明治四十四年一月元旦に発表され、以後百年余を経た現在も歌い継がれている。(尚、作詞者の堀越は大学医学部に進学したが二十六歳の若さで世を去った。)

戦後歌われなかった「三番」

明治・大正・昭和と愛唱され、土中生の心の拠り所だった校歌だが、終戦後一寸したハプニングがあった。私は旧制土浦中の最後の入学生として、昭和二十一年に入学したが、当時の校歌は一番、二番、四番のみで三番は歌われていなかった。歌詞にある「東国男児の気を享けて我に武勇の気魂あり」が問題視されて歌われなかったのではないだろうか。やがて数年を経て母校の教壇に立った時には、校歌は四番まであり、三番が復活していた。校歌四番の亀城五百の健男児は、時代により生徒数にあわせて、読み換えて歌っていたようだ。又、平成四、五年になって、創立百周年記念事業が準備され、種々の調査が行われ

る中で、戦後、校歌の一部が歌われなかった間に三番が変更されていたことが判った。元来は「この秀霊」だったものが「秀麗」になり、「東国男児の気をうけて」が「血を享けて」になり、「気魂」が「気魄」に変更され、歌詞としては整備されたものとなった。しかし、さて「どなた」の手によって変更されたのかということになると判らない。昭和二十三年に土浦中が土浦一高に校名変更した時に、新しい校歌を作ることが音楽担当の野尻干城先生によって提案されたが実現せず、その後校歌のことは話題にならなかったようである。昭和三十年代にどなたかの手によって変更されたようだ。(昭和三十八年建立の校歌の碑は新しい歌詞によっている。)



土浦一高旧本館前にある校歌の碑

作曲家「尾崎楠馬」先生 静岡県立見付中(現磐田南高)で校長二十年

話は変わるが、前述したように作詞者の堀越晋さんは若くして亡くなられたが、作曲家の尾崎先生が明治四十四年に青山師範に移られてからのことは知られていない。何年か前に、高二十回卒の渡辺慎一君から「尾崎先生は現在の磐田南高の初代の校長で、校長職を二十年も勤められ、最近没後五十年祭が同校同窓会によって行われたようだ」という話を伺った。まず校長を二十年なされたというこ



尾崎先生頌徳之碑の前にて
前列左から鈴木義人、飯村弘、後列左から上木幹夫、松井泰寿各氏と大曾根宏亮

年未しかも土曜日であったにもかかわらず、磐田南高では同窓会長以下同窓会関係者七名、学校関係者は副校長以下四名の先生方が暖かく我々を迎えてくれ、一時間以上にわたって、ドカ中(旧見付中)教育について語ってくださった。皆さん、初代校長のことを語る時、尊敬の念というか、校長に出会えた喜びに満ちあふれていた。歓談の後には全員の方々が尾崎先生の眠る見性寺での墓参にまでおつきあいいただいた。磐田は静岡県南西部の工業都市であるが新幹線は停まらない。磐田南高は大正十一年の創立で、磐田の旧名見付(東海道の宿場町)に因み、静岡県立見付中学校としてスタート

した。校地は旧遠江国の国分寺跡地と聞いているので、静岡県南西部の中心地と言えよう。静岡県では、見付中学校を開校するに当たって土浦中学から青山師範学校(現東京学芸大)教諭を経て、当時浜松師範学校の教頭をされていた尾崎先生に白羽の矢を向け校長に招聘した。尾崎先生は、郷里及び東京高師の先輩でありかつて土浦中学の校長として生徒に慕われていた遣沢恒猪先生(土中第二代校長、明治三十七年九月〜三十九年十一月在職、例のヒョットコ事件の責任を負って退職。尾崎とは一緒に勤務していない)を訪ねてスタッフ作りを相談した。遣沢は尾崎の補佐役として鹿児島出身の小田原勇を推薦した。尚、遣沢と小田原は土浦中でわずか一カ月しかともに仕事はしていないし、尾崎と小田原もわずか十カ月しか一緒に過ごしてはいない。しかし尾崎と小田原は同じボート(端艇)部の顧問として肝胆相照らすものがあつたのかも知れない。早速尾崎は小田原に教頭として補佐してくれるよう打電したようだ。当時小田原は朝鮮にあつて竜山中学の教師をしており、将来私立中学開校の夢を持っていた。勿論小田原は見付行きを辞退した。しかし再度の尾崎の懇願、遣沢の説得もあつて、見付行きを承諾し、ここに土浦中コンビによる学校作りが始まった。



尾崎楠馬校長と小田原勇教頭
「はぐま」(静岡県立見付中学校・磐田南高等学校創立70周年記念誌「卒業生座談会」)より

註 ヒョットコ事件

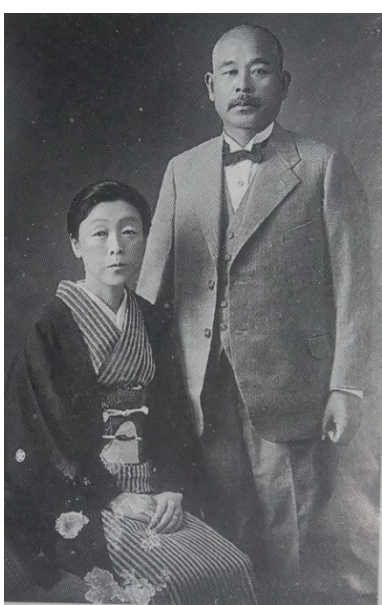
明治三十九年十月の土浦中運動会の仮装行列の際、三年生が町の山車(ダシ)を借り出し、この上でこっけいな所作をして運動会を盛り上げた。更に、生徒達は運動会終了後に山車を町にくりだし、やんやの喝采をあびた。このことが県議会でも話題になり「教員監督の下に行われたことが、非常に猥褻の行為をなした・・・」として問題視され、新聞等でも非難された。遣沢恒猪校長は、教職員・生徒を一切非難処分せず、全責任を負って退職した。この校長の態度に感動した生徒達は、その後猛勉強をし、すばらしい進学実績で校長に応えた。

ドカ中教育

尾崎先生は、単に国漢の教師であつただけでなく、俳句、和歌、漢詩にすぐれ、音楽更には水彩画にも秀でていて、入禅され仏道にもくわしい人格者だつたようだ。大正十一年(尾崎四十五歳)見付中学を開くに当たり、尾崎と小田原は「大学予科や専門学校への入学ばかりに熱中して、人の魂を養うことを忘れているような教育は駄目だ。心と身体を鍛える教育をすべきだ」と真の人間教育の確立を目指した。まず「学園を自分たちでつくろう」の合言葉のもとに、校長以下が毎日モッコ(縄などを網に編んだものの四隅に綱をつけ、棒を通して土石を運ぶ具)を担ぎ、鋤を握り、草をとってグラウンド造りに励み、県道から校門まで花や植木を植え、更に幅十五米、高さ六米、長さ百七十米の防風堤をつくり校舎を完成した。また、五十米プールも教師と生徒たちの手で完成した。正に教師と生徒一体となつてつくられた学校と言えよう。校則も厳しく、手袋、オーバー、校内での靴下の着用禁止、ポケットに手を入れること等はもつての外だつた。週末には五千米のマラソンを全員でやり、夕方出発して翌早朝に帰校する夜間遠足も屢々行われたようだ。正に教師

と生徒が一体となつての鍛錬教育そのものであつた。当初は、一部の父兄の批判もあつたようだが、進学実績もすばらしい成果があるに及んで、内外の支持を得て「ドカ中精神」として継承され、今に及んでいる。小田原教頭は、昭和三年十一月静岡県立榛原中学校(現榛原高校)校長に栄転するが、尾崎校長は昭和十七年三月まで、二十年の長きにわたつて見付中学校にあつて後進の指導に当たつた。先生にはお子さんがなく「父と呼ばれ母と呼ばれることもなくてさびしかりけりやすけかりけり」と歌われているが、退職後毎日和服姿で生徒達の登下校を見守つておられたのは、「ドカ中の全生徒、全卒業生」が先生にとつては実子そのものだったのでなかつたらうか。見付中学校図書館前に、昭和十八年に建立された尾崎先生の頌徳碑(時の文部大臣の書)があり、グラウンドには小田原教頭の頌徳碑が建立されており、お二人の偉大な業績が覗かれた。

昭和二十八年、尾崎先生が胃に変調を来たした時、東京大学木本外科に入院の交渉をされたのは、小田原教頭と教え子たちだつた。手術の甲斐もなく、翌二十九年二月五日七十七歳を一期に永遠の眠りについたら、危篤の報に接し多数の教え子たちが枕辺に集まつたと云う。葬儀は二月二十一日、磐田南高講堂において同窓会葬としてとり行われ、磐田市見付見性寺に葬られた。先生の没後、ご夫人は磐田の地にとどまり昭和五十一年に亡くなられた。



尾崎楠馬先生ご夫妻
結婚25年記念写真
(高6回大竹萬さん寄贈、校長室蔵)

尚、同校の図書館には「尾崎文庫」があり、

先生の多くの蔵書や開校当時の詳細な資料が収められているとのことである。更に、没後三十年の昭和六十年に先生のご遺族から尾崎邸跡地が同校に寄贈された。磐田南高では、跡地の売却費を元金にして、これに同窓生から集められた寄金を加えて、「尾崎教育振興基金」が設立されたと伺つた。

尾崎先生五十回忌

先生の見付中学への功績を記念して平成十五年二月二日に、同窓会主催による「尾崎楠馬先生五十回忌」が見性寺においてとり行なわれ、教え子だけではなく多くの卒業生が集まつたと伺つた。また、翌十六年四月には、「子を持たぬ我にすれば逝きましし父母のみぞ恋しかりける」と常に望郷の思いを持たれていた尾崎先生のご遺志をくんで教え子達十四名が、先生の郷里、高知県安芸市(旧安芸郡赤野村)を訪ね、尾崎家の菩提寺常願寺に詣で、先生の生家跡を訪問されたと伺つた。



静岡県立磐田南高等学校
尾崎楠馬先生50回忌特別号より

母校校歌にかかわるエピソードと銘打ちながら、校歌変更のいきさつもつかめず、作者の教育実践についても、その一部分しか紹介できず恥かしい限りだが、尾崎先生が静岡の地ですばらしい教育を展開されたこと、更に補佐役の小田原先生も青年時代を土浦で過ごされたことを報告して、文を終わりたい。

私の起業論

やりたい時に起業するのが
ベスト・タイミングです

寄稿



池和田 暁
(昭和40年卒)

私の経験した「起業と経営」について簡単にお話しさせていただきます。起業というキーワードに「日本を元気にする」ヒントがあります。私の経験が、将来起業される方々に少しでも参考になれば幸いです。

日本を元気にする起業のすすめ

私は税収増、雇用増に有効な政策は起業、開業支援、中小企業支援と法人税減税であると思います。我が国の雇用の70%は四三〇万の中小企業が支えており、それは我が国の企業数の99.7%を占めています。私がすすめる税収、雇用問題の解決方法は、従業員一〇〇名規模の新規企業を5〜10年間で政府主導で2万社程育てることです。それにより約二〇〇万人の雇用の創造と税収増になります。これは一般労働者数の約7%増に相当します。2万社の内50%は海外に支店を持つ企業にします。これによって外国人と交渉力を磨く機会も増え、外国からの観光客も増えます。定年を70歳に延長し、元気の良い会社経験者や優秀な若者には海外就業も含めて起業をすすめることが、日本を元気にする戦略的経済政策です。医療費も削減できます。以上のような提言をベースに私の起業の経験をお話します。

米国の起業家精神に触発され独立

私は、起業前は米国ボストンに本社があるデジタルイクイップメント、DECというコンピュータ会社の日本支社にいました。その会社が創業40年で消滅しました。エクセレント・カンパニーと評判の会社でしたが、成功体験が災いし「破壊的技術革新」に対応できずに躓いたのが原因です。DEC社はMIT出身のカリスマ性の強いケン・オルセンが起業した技術者魂を揺さぶる会社で、そこで起業家精神について学びました。

昔、東芝本社にケン・オルセン社長と佐波会長、渡里社長、青井副社長を訪問して歓談したのが懐かしい思い出です。また在職中に元DECユーザ会会長の石田晴久先生(東大名誉教授、一高先輩、故人)の所を訪問したところ、「池和田さん、VAXは素晴らしいコンピュータですね」と言われたこともありました。そんなDECが突然消滅したのを契機に、当時使われ出したSun Microsystemsが開発したオブジェクト指向言語のJavaに特化したソフトハウスを銀座で起業しました。

起業する人はごく稀

大学は工学部の電気工学科を卒業しました。当時は良い大学を卒業して、安定した大きな会社に入ることが一般的な考え方でした。卒業後、電気メーカーに入社しましたが仕事に興味を持てずにわずか3か月で転職しました。当時の世相では、転職は悪いイメージでした。クラスメートの転職は稀で、皆、電気機器会社、NNT、自動車会社、電力会社、TV放送局などに入り、定年まで真面目に勤務しています。しかし会社を起業した人はほぼ皆無です。

起業はリスクが高いですが、思い切つてぬるま湯から飛び出し、残された自分の人生の

可能性に挑戦したいと決断しました。DEC時代の友人がMITにいたので相談しました。会社の名前は友人がくれたMITコンピューターサイエンスラボ所長、ダートウズ教授の著書「What will be」を読んで「Nihon insight technologies corporation」と決めました。会社の徽章や経営理念は自分で作りました。ボストンはDECが存在した古い大学の町で、魚介類も豊富、音楽、美術館、野球も楽しめるので、そこに情報拠点としてブランチをつくりました。

筑波山を会社の徽章に

私の故郷は寒村の旧朝日村(阿見町実穀)です。筑波山や霞ヶ浦は多感な子供時代の原風景です。農作業を手伝いながら、うなぎや鱈を捕まえたり、焚き火で焼き芋を焼いたり、厳冬の夜空に輝く満天の星座を眺めながら自由に粗野に育ちました。朝日中学の先生の勧めで一高に進学したのが人生の岐路になりました。

そんな訳で会社を創業した時、会社の徽章は「心のふるさと筑波山」にしました。筑波はリサーチトライアングルとして国際的に知名度があり「科学技術で未来を切り拓く」という会社の理念にも合います。

一高校歌の「我に寛雅の度量あり、我に至誠の精神あり、我に武勇の気魄あり」は私の人生の指針です。また経営理念の一つは校歌の「至誠の精神」です

私の会社「日本インサイトテクノロジー」は今年で創業13年目になります。学生向けリクナビで平均年齢28歳の「JAVVA技術者集団」としてみかけると思っています。

今年5人の新卒を採用しました。内訳は筑波大学院情報系2名、早大理工院1名、東工大院1名、東大法1名です。ソフト開発会社として主に情報通信分野、金融証券、生損保、官公庁、組込み分野のソフト開発を行

っています。

具体的には次世代通信ネットワークN、Saasの基盤開発やhonmeITCソフト開発、Web banking、FX金融先物取引システム、自動車保険システム、郵貯、社保庁システムの開発、電子マネーシステム、複合プリンター、Android携帯ソフト開発などを行っています。

起業する時大切と思っていること

① 起業家には夢と目標が必要

こんな会社になりたいという強い夢や理想がないと、日々の仕事に気合が入りません。目標は「日本でNo.1のJAVVA技術者集団」と「高度なIT技術を通じて社会に貢献すること」

② 経営理念、志、共通DNAが大切

5つの経営理念。「お客様のためにベストを尽くす。成長する。創造的であれ。至誠の精神。個人の尊重とチームへの貢献」

③ ビジネスモデル

④ 人を活かす能力

⑤ スピード。

ベンチャーはスピードが命、大企業と戦うにはスピードが武器。織田信長、ジンギスカンしかり

⑥ 楽観主義

⑦ 生き生きと働く企業風土作り

自由闊達で風通しの良い職場が目標

いくつかの社内活動を紹介します

月例ビアパーティー・毎月の誕生日会・サークル活動(フットサル部、バスケット部、ゴルフ部、囲碁部)インサイトBar(社内で若手が月1回開催)・社内報(毎月社員が編集・社長室から、技術動向、私の週末、私の故郷、部活報告、ボストン便り、書評、産業医の健康コーナー)・社内イベント(キックオフ会議、忘年会、新人歓迎皇居一周マ

ラン大会、創業記念ゴルフコンペ)

おわりに

最後に「起業する年齢」と「起業家の責任」を考えてみます。起業に成功するには「一日20時間、仕事を考える状態を5年間は続ける必要がある」と言われます。私の経験でもこれは事実です。体力がある若いうちが有利ですが、私は52歳で始めました。体力がなければ年齢は関係ないと思います。

また「起業家としての責任」は、起業を支援してくれた人に十分報いること、社員、顧客、株主との倫理的、公平な関係の構築とだと思います。

私は起業して良かったと思います。理由は10年間苦勞しましたが、起業したので二〇〇名の若者の雇用の職場をつくり、税金を納め社会貢献できたからです。ITの専門書を書いたり、DB設計のオープンソフトで世界標準と評価されるソフトを開発するレベルの技術者も育ってきました。これまで支援していただいたお客様、社員、会計士、友人、株主、政府に大変感謝しています。NPO活動も立派な社会貢献ですが「起業も社会貢献」であることを知っていただきたいと思えます。ケン・オールセン氏が起業したDEC社は10万人の会社に成長し、当時エクセレント・カンパニーと賞賛されましたが創業から40年で消滅しました。大きな原因の一つは後継者を育てなかったことです。どの分野でも同じことですが後継者の育成が大切です。

以上、私の起業経験を紹介致しました。皆さんも機会があれば、是非起業に挑戦してみてください。やりたい時に起業するのがベスト・タイミングです。

いけわだ さとる (第17回卒)

日本インサイテックテクノロジー株式会社
代表取締役社長

(千葉大学工学部大学院非常勤講師)

水戸観梅紀行

若山 宏 (謳吟会会長)

昨年の一泊旅行はつくばの桜を見て、筑波に泊まるであった。ところが早すぎて桜は二分程度の咲き具合。今年の借楽園の観梅とアニコウ鍋を食する一泊旅行は如何になるのかなと気にしながら当日を迎える。

私は車で参加することに。他の車での参加者と常磐道水戸インター出口で十時〇分までに集合としていた。天気予報は、関東地方は雨とのこと。朝霞市を出る時は雨が降っていた。高速道路はすいすい、混雑を予想して早めに出たので、このままでは一時間前に着きそう。パーキングエリアで時間をつぶす。他の車も同じように時間をつぶしたそうだが九時三十分に揃う。

今日の案内役を買って出た内田さんは私と同じクラスで、茨城県庁に勤めていた。今は年金暮らし。彼が駐車場所を茨城県立歴史館にするよう提案。それに従う。

電車組との待ち合わせは十一時十分借楽園臨時駅だったので、周辺を少し散策。雨が降り気温が低く本当に冷える。寒いので休憩所に入る。私は甘酒を所望。これが美味しい。味が深い。ほどよい甘さ。酒の香り。身体が温まる。

予定時刻になり、借楽園臨時駅に向かう。参加予定者全員が揃う。

本日に晴れ男が居るかのようになり、それまで降っていた雨が止む。心なしか気温が上がったような感じがする。

内田さんから借楽園の見学コースが提案され、それに従う。最初は、光圀公・斉昭公が祭られている常磐神社に参拝。神社の脇には能舞台が建てられていた。少し戻り借楽園に入る

借楽園は斉昭公が士農工商という身分の境をなくし、誰でもが集まれるようにという理念で作られたので、今でも無料で開放されているとの話を聞いた。借楽園の理念が西洋の公園より早い時期に作られたのは、興味を引くとのことだった。

彼の説明を聞きながら公園内を散策。梅の咲き具合は四分から五分程度と思われた。



高台から望む梅林

ボランティアの黄門一行との記念写真を撮った後、好文亭に入る。この入場料は百九十円であったが、七十歳以上は無料とのこと。参加者メンバーのうち該当者は、早速身分証を提示していた。

好文亭は、斉昭公によって休憩所として建てられたもので、素剛優雅な外観は水戸武士の風格が漂う建築だ。襖絵は趣があり結構楽しめた。部屋の畳は何かしら小さいような気がした。三階にはリフトがある。天井に滑車がついていて、食事でも運んだのではと思つた。階段が急で、荷物を持って上がるのは厳しい。ここからの千波湖を見る景色は壮観であった。



好文亭3階から遠く千波湖を望む

次に湧水の吐玉泉に向かう。水量は今でも豊富である。かつては、飲用にできたが、今は適さないとのこと。台座は大理石でできているので、浸食が激しく早く痛むとのことである。さらに、旧水戸高にあった鐘が置いてあるところへ。今の水戸高とはまったく違うとのことであった。近くの梅の咲いているところで、全員で記念写真を撮る。



紅梅をバックに記念撮影

予定の時刻が近づいたので竹林を通り、南門もぬけ、歴史記念館の駐車場へ向かう。



南門で内田さんの説明を聞く

昼食は茨城県立近代美術館のレストラン。その後、美術館を見学することに。入場料は、常設展が大人三〇〇円、こども七十歳以上は無料であった。展示されていた作品は、横山大観、菱田春草、下村観山、木村武山ら北茨城市の五浦の地で研鑽を積んだ「五浦の作家」や、生涯の大半を牛久沼の湖畔で過ごし農村の風物や水辺の生き物を好んで描いた日本画家小川芋銭、大正期の洋画界にあつて自らの生を深く見つめて描いた中村彝など、茨城にゆかりのある日本近代美術史において重要な役割を果たした美術家のものであるという説明。その他は、クロード・モネの「ポール・ドモアの洞窟」、オーギュスト・ルノアールの「マドモアゼル・フランソワ」などの有名な作品がある。特別展は、遠慮した。ここで内田さんと別れて宿泊地の大洗に向かう。内田さんの解説は当事者しか知らない苦労話など本当に面白かった。内田さんに感謝。

ホテル自慢のオーシャンビュー大浴場で一風呂浴びてから宴会場へ。東進会大野会長の挨拶に続き、土浦市在住の小松崎清さんの乾杯で開宴。酒は、支配人提供の「和の月」をはじめ、交渉のうえやつと持ち込みが許された「真向勝負 純米大吟醸」「山桜桃」「武勇しぼりたて」「吟醸 霧筑波」「渡舟 しぼりたて生吟」。さすが茨城の銘酒、みんな美味しい酒だった。

今日の目的の一つは、アンコウ鍋であった。量は少なめであったが、本場のアンコウはさすがに生きがよく、歯ごたえを感じながら食べる。これは美味、本当においしい。やはり、地元で食する喜びを感じる。最後は鍋に飯を入れておじやにした。

カラオケ大会も始まった。次々とのどに自慢の会員が美声を披露した。「青い山脈」を歌い締めにする。本当に時間のたつのは早い。翌日の朝食のとき、何か問題が発生しているのと聞いたので、部屋に戻りテレビを見る。

チリでマグニチュード八・八の地震が発生し、津波が日本を襲う可能性があるとのこと。津波の日本到着は、いま計算中であるが午後との予想で、のちほど詳しい情報を提供すると気象庁の担当者が語っていた。大野会長と相談し、予定通り大洗水族館に行くことにした。天気予報が当たり、雪交じりの冷たい雨が降っていた。イルカショーを見て、次の予定那珂湊市場へ。

市場は海のすぐ側。本当に寒い。ひととおり見学して、二階の魚料理店で昼食へ。しかし、混んでいてなかなか順番が来ない。待ち合い客が、大洗水族館は津波のため午前中で終了と言っている。それが事実ならこれは大変なことになる。直ちに帰路につくことにした。常盤道でのラジオは、ひたちなか市に避難勧告が出たと報じていた。鉄道は、内房線や外房線など沿岸部を走る数線が運転見合わせとか。私は、車のため問題なく家についた。

半了のささやき(第9回) タンジエント

高山寺 半了

お陰さまで半了のささやきも、5年目を迎える事が出来ました。5年前「ささやき」と言えばまだ日蔭者。昨今は「ツイッター」なる物が大流行のようですね。英語で「小鳥のさえずり」を意味し、日本でもツイッターにはまる政治家が急増。つい最近もツイッターに夢中で参院予算委員会に3人の閣僚が遅刻果ては「鳩は小鳥」と、お坊ちやま首相も、普天間問題よりさえずりに御熱心とか・・・。「半了のささやき」は「愚かなさえずり」に随することなく「賢いささやき」たらんと5年目も頑張ります。

さて今回のお題は「タンジエント」。お分かりですよね。その昔、県南の俊英賢女が集った土浦一高OBの皆さんなら。え！何の事か分からない。そうですか、ヒントを一つ「三角関数」。三角関係なら分かるが・・・ちょっと貴女、それじゃまるで綾小路きみまろ「あれから40年、昔可憐な乙女、今や豊満な熟女」状態ですよ。「サイン、コサイン、タン・」思い出しましたか、t a nを。

「タンジエント」は直角三角形で傾きを表します。東進会会員の大半は戦後高度成長期に、ずくと長い右肩上がりの坂道を駆け上り、戦後の「坂の上の雲」を追いかけて来られたね。長い間本当にご苦労様でした。然るに今、毎日充実して幸せですか。年金を心配し生活習慣病に悩み、冠婚なくなり葬祭ばかり。明日は我身かと不安な日々を漫然と過ごす。マニフェストに期待し民主党に投票したが、気がつくともまるで「おれおれ詐欺」状態。日本人は上り坂には強いが、下り坂には弱い。目指すものがあって、追いつけ追い越せはお得意だが、いざ頂上に立ってみると、さあ大変。何をしても良いか分からない。これは、内

田樹著「日本辺境論」(新潮新書)によると古代の日本国創設以来の国民性だそうです。従って貴方がどう嘆こうがちよつとやそつとではどうにもならない。しかし国民性はともかく、貴方の毎日まで無為にする事はないですよ。そこで50歳を過ぎ、仕事でも家庭でも先が見えてきた、そう人生の下り坂に突入した皆さん、どうすれば又、若い時の様に、夢中になれる毎日を過ごせるのでしょうか？

そこで、今回のささやきは「人生に遅すぎると言う事はない。50歳でも60歳でも新しい出発はある」。48歳で世界初の即席麵「チキンラーメン」を、61歳で世界的食の大発明「カップヌードル」を世に出した安藤百福さんが、91歳となり自らの人生を振り返った時の言葉です。そうですね。新しい事を始めれば良いんです。何でも良い。嫌な事はやらず、好きな事、ちよつとでも興味のある事をまずはやってみる事です。詰らなかつたら止めれば良い。気楽に考え、まずは始める。

脳神経外科医の林成之氏によると「脳神経細胞がもつ本能は、たった3つです。「生きたい」「知りたい」「仲間になりたい」(中略)人間の脳にとつては「興味をもつこと」こそが、すべてのはじまりなのです。」(幻冬舎新書「脳に悪い7つの習慣」だそうです。

新しい事を知る喜び、少しでも上手くなる充実感、これらは全て脳の自己報酬神経群の機能を活発にし、達成感が沸いてくるのです。

例えば60歳からゴルフを始めて、空振りも曲がりばかりで遅々として上達しなくても、諦めずに練習すればやがて空振りも無くなりま

す。今日より明日が少しでも進歩してくると更にやろうという意欲が出てきます。つまり傾きIIタンジエントは、ゆるやかで良いんですよ。ゼロから始めれば必ず進歩します。再び自分で自分にあつた坂道と坂の上の雲を見つければ、今日より明日が良くなる、希望が持てるようになります。これからの人生も楽しいものになりますよ。さあ一歩踏み出しませんか。

東大は例年並みにV回復 今年度大学進学状況

土浦一高は全国の公立高校の中で東大合格者がトップクラスと話題になっているのでやはり今年の進学実績が気になるところ。昨年10名減らして16名に落ちたが今年は24名と平成16年以降の20名台に戻した。(それ以前は30名台)

国公立大学

入試年度 大学	平成18年		平成19年		平成20年		平成21年		平成22年	
	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新
北海道大	8	4	4	1	4	3	3	1	6	1
東北大	22	16	19	14	21	15	27	20	15	10
茨城大	9	9	11	10	9	7	7	7	12	8
筑波大	39	29	51	38	49	37	38	30	42	35
千葉大	17	9	11	6	7	7	12	8	9	4
お茶女子大	6	4	6	5	5	5	8	6	5	4
東京大	21	15	28	19	26	15	16	10	24	14
大東京外語	4	4	3	3	3	2	1	1	5	4
東工大	5	3	8	4	9	4	13	5	5	4
一橋大	4	2	6	3	3	1	11	3	11	6
横浜国立			4	1	4	3	4	3	6	1
京都大	4	1	3		7	7	5	3	4	3
大阪大	7	4	1	1	2	1			2	
名古屋大	1	1	2	1	1	1	1	1	2	
九州大			2				1	1	1	1
その他	30	14	31	18	29	18	23	9	24	5
国立大計	177	115	186	123	179	126	170	108	173	
公立大計	12	6	7	4	11	7	6	3	12	7
国公立大計	189	121	193	127	190	133	176	111	185	107
内医学科	21	10	13	8	12	7	16	4	9	1
大学校計			3	2	4	2	3	1	3	2

私立大学

入試年度 大学	平成18年		平成19年		平成20年		平成21年		平成22年	
	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新	計	内新
青山学院大	12	10	21	18	20	14	8	7	24	15
学習院大	8	7	8	6	12	6	9	4	11	6
慶応大	53	26	68	40	52	22	58	27	51	22
国際基督大	4	1	7	6	3	3	7	5	8	8
上智大	17	12	30	18	17	11	21	14	22	10
中央大	39	23	32	13	27	13	57	18	45	14
津田塾大	4	4	15	13	9	5	8	8	6	3
東京女子大	7	6	15	10	11	6	2	2	11	4
東京理科大	106	48	110	39	111	62	107	45	88	44
日本女子大	5	4	11	9	18	13	17	10	14	9
法政大	21	13	18	9	18	10	26	14	33	17
明治大	74	40	68	44	65	27	89	41	78	37
立教大	38	23	37	24	42	23	58	32	53	30
早稲田大	87	46	121	72	87	45	109	59	105	50
その他	196	72	123	72	135	73	137	61	135	70
私立大計	671	335	684	393	627	333	713	347	684	339

総計	860	456	880	522	821	468	892	459	872	448
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

全国の公立高校の中では岡崎、日比谷、旭丘、浦和に続いて第5位、うち現役の合格者は、岡崎、日比谷、岐阜に続いて第4位だった。

私立を含めた上位3校(開成・灘・麻布)も昨年減らしたが、今年はそれぞれ168名、102名、84名と挽回している。進学先が一番多いのは国公立では筑波大の42名で地の利を得て全国1位、一橋大も昨年と同じく11名と多い。

私立大では、早稲田大105名と圧倒的に多く、次いで、東京理科大88名、明治大78名、慶応大51名とほぼ例年どおりである。

新二、三年生38名は、進修同窓会の補助(引率の3先生分)のもと、この春休みを利用して米国の海外研修に出かけて大きな成果を収めたと聞くが、東大合格だけが目的ではなく、時代の先駆けとして幅広い知識を学んで貰いたいものである。

編集後記

昨年の五月末、土浦市内の霞月楼で開催されたクラス会に出席しました。その席上、恩師の大曾根宏亮先生から、母校にかかわるさまざまなお話を伺うことができました。なかでも、校歌の作詞者や詩文の変化に関する話題を、もつとも興味深く拝聴いたしました。この秘められたエピソードを広く皆さんにお知らせしたくて、大曾根先生に執筆をお願いしましたところ、ご快諾をいただき、巻頭を飾っていただけたことになった次第です。

◆池和田さんは、起業されてすでに十三年余のこと。順調に業績を伸ばされています。そんな思いをこめて、四〇〇〇字にのぼるご寄稿をいただきました。さて、池和田さんは、一高校歌は人生の指針であり、校歌「至誠の精神(こころ)」の一句は経営されている会社の経営理念の一つにも掲げておられます。校歌の重みをあらためて実感した次第です。

◆表紙の写真は、熊木士郎さんにお願ひし、校歌に謳われている筑波山の雄姿と霞ヶ浦としました。

◆そのようなわけで、今号は、大曾根先生、池和田さんそして表紙の写真が、「校歌」つながりとなりました。六月十三日の東進総会でも、応援指導部の現役とOBのリードで校歌を大合唱します。久しぶりに、級友と肩を組みお腹の底から声を出して校歌を歌ってみませんか。「沃野一望数百里 関八州の重鎮とて・・・」昨年以上の大勢の皆さまの出席をお願いいたします。

◆チリ地震の津波襲来と重なった「水戸観梅紀行」は、謳粹会会長の若山宏さんに健筆をふるっていただきました。写真とともに行間からも楽しさがあふれています。高山寺半了さんの「半了のささやき」も連載五年目に突入しました。筆がうなり、ますます冴えわたっています。(初)

平成22年度 総会・懇親会のお知らせ

| とき | 平成22年6月13日(日)

12:00 母校の弦楽部による演奏と応援指導部による演技

12:40 総会

13:10 講演(内容は下記ご案内のとおりです)

13:40 懇親会

| ところ | 学士会館

千代田区神田錦町3-28 03(3292)5936

学士会館へのアクセス

地下鉄都営三田線・新宿線「神保町駅」下車 A9出口 1分

東京メトロ半蔵門線「神保町駅」下車 A9出口 1分

東京メトロ東西線「竹橋駅」下車 3a出口 5分

「東京駅」北口からタクシーで10分

| 会費 | 東進会年会費 3,000円

懇親会費 5,000円

同封の振込用紙をご利用ください。

講演内容

スピーカー 鈴木 貴美子さん(昭和55年卒)

演題 キャリア形成とネットワーク

鈴木貴美子さんは、お茶の水女子大学を卒業され、外資系企業の人事畑を一貫して歩みながら、転職を繰り返しつつキャリアアップするという典型的な米国流ワーキングスタイルを実践されてきました。

今回は、鈴木さんの豊富な体験を踏まえて、キャリア形成におけるネットワークの重要性について講演していただきます。

女性や転職によるキャリアアップに関心のある方には大変有意義で、きっと素敵な「人の輪」が広がっていくものと思います。

ぜひ、お友達にも声をかけていただき、大勢のみなさまのご参加をお願いいたします。

総会開会の前に、母校の弦楽部による演奏と応援指導部による演技が披露されます。

ストリングスの調べにひたり、応援指導部の現役とOBとのリードによる校歌の合唱はいかがでしょうか。